

イネ紋枯病に対するペンフルフェンを含む育苗箱施用剤の防除効果

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

イネ紋枯病は水稻重要病害の一つであり、特に本県では主要早生品種‘コシヒカリ’で被害が大きい。そのため、本病の常発地域では、各種の育苗箱施用剤による予防防除が行われている。本県では育苗箱施用剤の播種時処理が広く普及しており、新剤に対する関心も高い。このような状況の中で、イネ紋枯病に対して播種時処理が可能な新規成分ペンフルフェンを含む育苗箱施用剤が農薬登録された。そこで、本成分を含有する育苗箱施用剤のイネ紋枯病に対する実用性を確認するため、作付割合が高い早生品種を対象に防除効果を検討した。

(2) 情報・成果の要約

イネ紋枯病に対して、ペンフルフェンを含有する育苗箱施用剤は、播種時（覆土前）～移植当日の処理により高い防除効果が得られる。

2 試験成果の概要

(1) イネ紋枯病に対するペンフルフェン剤の育苗箱施用の防除効果

イネ紋枯病に対して、ペンフルフェンを含有する育苗箱施用剤（3 利用上の留意点を参照）は、播種時（覆土前）～移植当日の処理（50g/箱）により、オリサストロビン剤（嵐プリンス箱粒剤 10）の同処理と同等の高い防除効果が得られた（図1）。また、薬害も認められなかった。

3 利用上の留意点

(1) 本成果は、早生品種を対象とする。中生品種については現在試験中である。

(2) 2016年12月21日現在、ペンフルフェンを含有する新規育苗箱施用剤として、エバーゴルワイド箱粒剤/エバーゴルプラス箱粒剤（イミダクロプリド 2.0%、クロラントラニリプロール 0.75%、イソチアニル 2.0%、ペンフルフェン 2.0%）、エバーゴルフォルテ箱粒剤（イミダクロプリド 2.0%、イソチアニル 2.0%、ペンフルフェン 2.0%）およびルーチンエキスパート箱粒剤（イミダクロプリド 2.0%、スピノサド 1.0%、イソチアニル 2.0%、ペンフルフェン 2.0%）が農薬登録されている。

(3) 早生品種において、エバーゴルワイド箱粒剤、エバーゴルプラス箱粒剤およびルーチンエキスパート箱粒剤は、イネいもち病（葉いもち）および本県で問題となるイネの初中期害虫に対しても安定した高い効果を示すため、全域で使用可能である。一方、エバーゴルフォルテ箱粒剤には、チョウ目害虫に対する有効な成分が含まれていないため、同害虫の被害が発生する地域では使用を避ける。

(4) 薬量が不足すると防除効果が低下するので、極端な疎植は避けて、規定量を均一に散布する。

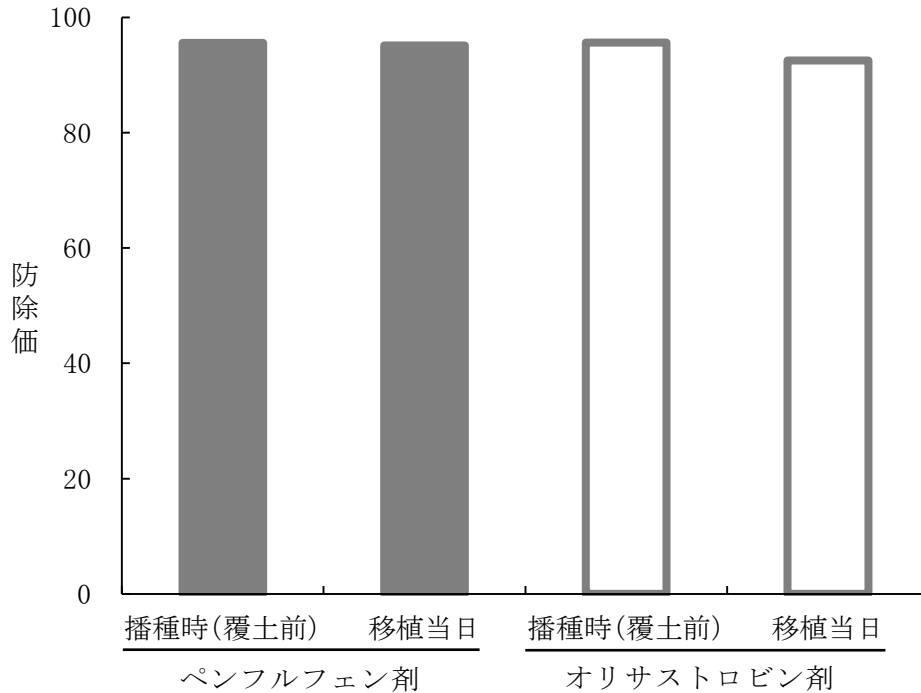


図 1 早生品種におけるイネ紋枯病に対するペンフルフェン剤の育苗箱施用の防除効果 (2009～2010年、2012～2013年)

注) 試験場所：鳥取市橋本（鳥取県農業試験場）。

耕種概要：品種；‘コシヒカリ’、播種日；5月1～3日、移植日；5月24～26日（稚苗機械移植、18箱/10a）、出穂期；8月3～12日。

発病調査：調査日；9月2～10日、防除価：被害度から算出、2009～2010年、2012～2013年の4試験例の平均値。

無処理区の発病程度(被害度)：2009年；多発生(53.1)、2010年；中発生(25.1)、2012年；多発生(61.6)、2013年；多発生(60.6)。

供試薬剤：ペンフルフェン剤；エバーゴル箱粒剤(2009年)、エバーゴルワイド箱粒剤(2010年および2012年)、ルーチンエキスパート箱粒剤(2013年)、オリサストロビン剤；嵐プリンス箱粒剤10。いずれの薬剤も処理量は50g/箱。

4 試験担当者

〔環境研究室 主任研究員 長谷川優^{※1}
 研究員 稲本勝太^{※2}〕

※1 現 環境研究室 室長

※2 現 作物研究室 研究員